

Title	花街における芸の継承：京都北野上七軒の北野をどりを中心に
Sub Title	
Author	中原, 逸郎(Nakahara, Itsuro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.70 (2010.) ,p.149- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成21年度博士学課程生研究支援プログラム研究成課報告書
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

・学会報告②「戦艦大和のイメージ変容と戦後日本の戦争“感” —大和・ヤマト・YAMATO—」

本報告が扱うのは「戦艦大和」のイメージ／表象である。周知のように「戦艦大和」は、その巨大な体躯と有していた高い性能、また悲劇的な最期ゆえに、〈物語〉を喚起し、現在に至るまで数多のイメージ／表象文化を産出し続けている。だがそうしたイメージ／表象の“過剰さ”とは相反して、「戦艦大和」を対象とした社会学的研究はほぼ皆無である。恐らくは、従来の戦争に関する社会学的研究からは零れ落ちてしまうような場所に「戦艦大和」のイメージ／表象は棲息しているのである。

本報告ではこの「戦艦大和」のイメージ／表象の勾配及び変容を歴史的に追返し、それらと戦後日本の社会意識との相関関係を描出する。その際に、副題にある三つの「大和」表記—これはそれぞれに代表的な「戦艦大和」の表象文化に拠っている—に対応した時代区分を補助線として導入する。すなわち、吉田満『戦艦大和ノ最期』に始まる「大和」の時代：1952～60年代、次いで松本零士『宇宙戦艦ヤマト』に代表される「ヤマト」の時代：1970～90年代、そして映画『私たちの大和／YAMATO』に因る「YAMATO」の時代：2000年代、である。

戦争あるいは戦争体験に関する社会意識を論じた従来の歴史社会学的研究（例えば吉田裕『日本人の戦争観』など）によって、戦後日本社会の戦争“観”が明らかにされてきたとすれば、本報告によって試みられるのは、「戦艦大和」というユニークな光源でもって戦後日本社会の戦争“感”を照らし出すことである。

なお、上記Ⅱに関しては、2009年8月に広島県呉市に於いてフィールドワーク及び資料収集を行っている。

花街における芸の継承—京都北野上七軒の北野をどりを中心に—

中原 逸 郎

1. 問題の所在と研究の目的

京都において花街（かがい）は、地唄（上方唄）ともてなしの文化を継承する場として、今日の観光においても重要な資源である。格式を重んじる京都の中でも北野上七軒（上京区）は最古の花街とされ、古風な風情と芸を伝えているとの定評がある。かつて全国に点在していた花街と呼ばれる地域は近年急激に姿を消し、在りし日の記憶を残していない場所が増えている。その中であって、京都には未だ花街が存在し、観光や社交の場として存在感を示している。

しかし、花街の芸の継承は後継者問題、花街の維持など様々な課題も抱えていると考える。京都の春の風物詩の一つである北野上七軒の「北野お（を）どり」は、戦時中の芸の稽古不足など芸の継承の危機の時代を経て、未だ戦後色が濃い昭和27年（1952）年に誕生した。京都市の中心部から離れている立地、少人数での舞台演出など様々な課題を乗り越えて、今日まで花柳流を中心とするなど諸芸を伝えている「北野をどり」誕生の背景はどのようなものであったか。その継承の背景の分析から芸能に対してどのようなメッセージを読み解くべきかを研究していくことを目的とする。

2. 先行研究と本研究の意義

花街は研究論文の少ない分野であるが、近年発表された研究には、『伝統文化産業の事業システム—花街の事例』（西尾：2006）、『「花街」異空間の都市史』（加藤：2005）などがある。また、上七軒に関しては、「北野上七軒の街並風景」（畠中：1999）、『花街の真正性と差異化の語り—北野上七軒と五番町をめぐって』（竹中：2007）がある。

花街研究の動向として、『花街のおもてなし文化の変遷と課題について—祇園甲部の地方、幸長さんの談話を元に—』（西沢：2008）のような、花街の内側の人に対するインタビュー形式のものが出た。こうした論文はまだ少なく、上七軒に関しては未だ研究が始まったばかりだと考えられる。本研究では上七軒の花街の心情や芸の継承の課題に迫るため、現役の芸舞妓や元お茶屋関係者の語りを収集し、人々の生きざまや考えを考察していく。

3. 北野上七軒に関する語り

北野上七軒について、明治5から6年に京都府権知事榎村正直に対して提出された『京都府下遊郭由緒』には、「上七軒は古くは七軒茶屋と言ひ、足利時代に山城国立法令により北野神社造営之成候時、茶屋株免許を与へたとのことである。」としている（新撰京都叢書刊行会：1986）。

また、『北野社家日記』の明応2年（1493）3月24日の北野社の茶屋放火事件（新撰京都叢書刊行会：1986）や元和4年（1618）12月10日の「北野七間（軒）」（続群書類従完成会：1972）などには茶屋の記事があるという。これらから、北野上七軒と北野天満宮との関連を見ることができる。

これらの茶屋が母体となったと思われる北野上七軒は、寛政2年（1790）発行の『京都土産』には、「時々舞踏の催しありて芸能精妙の評高し」の注がつけられているという。（明田：1990）この記述から今日の「芸どころ」の評判のある上七軒の原型が出来上がっていることがわかる。

上七軒では、大正時代から花柳流が入り始め、花柳の下で芸の研さんに勤めた。北野をどりの始まった昭和27年（1952）当時を知る現役芸妓の話を聞いても、常磐津、清元など数多くの芸のできる芸妓が「たんと（たくさん）」いたという。これらの人々の語りを集め、この花街の芸の流れと背景を社会構造の変化や時代の流れから見ることを研究の指針としている。

4. 2009年度の研究概要

年度前半は、京都の図書館の郷土史を中心に、上七軒のある上京区の歴史の流れを把握することに勤めた。とりわけ、写真により時代背景を考察することとした。また、上七軒に関する歴史記事を集めたが、資料が乏しく、「北野をどり」の関係記事の収集に絞った。

これによると、北野上七軒の芸妓像は「物静かで上品でしかも芸達者」（石田：1973）の言葉に集約されそうだ。そのために、七科目（舞、清元、長唄、常磐津、鳴物、笛、小唄）に加え西方寺（天台宗）の指導による裏千家のお茶のしつけを受けていることで他の花街と比べ芸の修練が厳しいこと、とりわけ、お茶に関しては、舞妓になるまでの「仕込み（見習い）」時代から学んでいることがわかった。

また、北野をどりの指揮をとっていたのが、東宝の映画監督の石田民三（1924-1972）で、秋田県出身のこの監督が台本を書き、北野をどりで創作劇を上演した。その稽古は厳しく、厚い台本を渡され、通行人役だけを6役もさせられた者もいた。また、宴席での仕事があつて稽古を休むと厳しく叱られた、など北野をどり開催当時の様子がわかった。石田のおかげで民謡を覚えたり、南座（東山区）で大

人に交じって劇を演じたりと、石田の強力なリーダーシップの下に様々な体験ができたと言語者が今も上七軒には多い。

ここで集めたデータをまとめた。

北野をどりが開始されたころは、お茶屋が34軒、芸妓も40名位いる。昭和31年には舞妓が1名誕生したが、その後この舞妓が芸妓になると、上七軒では、昭和57年まで舞妓は存在しなかった。芸妓は昭和30年代後半から、芸妓（立方）と地方に分離していった。平成22年の第58回北野をどりでは芸妓17名、地方11名である。舞妓は昭和57年の舞妓の誕生から地方出身者を受け入れた結果徐々に増え、平成に入ると平成9年の7名、平成17年の9名と変化し平成22年度は8名の舞妓が在籍している。京都の花街にとって舞妓は、街の雰囲気華やかにするとともに、芸の修養を重ねて芸妓や地方（じかた：三味線伴奏者）となり、花街の芸を継続していく上で重要な存在である。

この北野をどりのデータで一番変化の激しいのは、お茶屋の減少であり、昭和27年に34軒あったものが、昭和45年（1972）の26軒、昭和51年19軒と減少し、昭和22年の10軒にまで減少していることがわかった。特に平成13年には老舗のお茶屋が3軒閉店したことがわかった。

年度の後半は、前半の調査の背景と北野をどりの特徴が少しずつわかり始めた。

北野をどりがはじまったころ、上七軒には舞妓制度がなく、少女さんと呼ばれる、上七軒関係者の娘が中心となったお稽古の会があった。石田民三がこの稽古を指導した昭和30年代には、「若葉会」と呼ばれ、上七軒の芸妓が「少女さん」の育成に携わったという。

これらの少女さんは、「お腹の中（生まれた時）」からいい音を聞いている者が多く、15歳でデビューする時、舞妓ではなく、芸妓として出た者もいた。5歳から三味線、6歳から踊りの生活であった、という。先輩芸妓より芸ができるものもいたようである。

石田は昭和35年（1960）には「人形寺春の夜話」を上演した。この出し物では芸妓が西洋人形の扮装で出演し、この時オランダ人形の扮装で出演した芸妓にも当時の奇抜な出し物のことを聞いた。また、昭和41年（1966）には新邦楽と題し「マリモ笛」という出し物が演じられた。これは、石田が東京の明治座で演じられた劇を再現したものであり、この時芸妓たちはアイヌ娘の扮装で出ている。このように、石田の指導のもとで斬新な出し物が演じられ、上七軒の「新たな伝統」となっていった。古からの伝統を継承していくには、こうした「新たな伝統」をいかに創造するか、ということかと考える。

上七軒のことが語られる時、その顧客として西陣の旦那のことが語られることが多い。

西陣の旦那衆は商売がうまくいっていた昭和の初めごろは昼間から上七軒に出向いていた。番頭さんが晩の着替えを持ってきていたという。そういう、余裕のあるスポンサーを背景に、上七軒の芸は育っていったと考えられる。石田の言う、「物静かで上品でしかも芸達者」の芸妓像が浮かび上がってくる。

西陣のスポンサーは、踊りの会など上七軒の行事の度に、帯や着物や楽器を新調し、応援してくれたという。こうした寄付の様子は、「北野をどり」のパンフレットの寄贈の記述からも読み取れる。寄贈者に帯や着物を呉服関係の商店や企業が名を連ねている。

こうした背景には、呉服関係者にとっても芸妓が宣伝効果があり、寄贈する効果があったとも考えられるが、「旦那」自身が芸達者であり、自分の得意な芸を宴席で披露するということが多かったことも見逃せない。西陣の旦那に対する上七軒の芸妓の評価は「文化的」である。帯を作っていること（商売）と芸術の関係性を述べる芸妓もいた。また、こぼれ話的に述べられたことによると、芸妓を背負い投げした旦那や芸の披露を十要求して九までできたが、一つだけ間違えたために帰ってしまった旦那も

いたという。芸妓を育てようとするのと同時に、芸妓に対し親しさを感じている旦那の姿が表れていると考える。

昭和40年代から50年代に入ると高度成長時代で、上七軒にも新たな時代の変化が押し寄せてきた。西陣は「ガチャ万景気」という時代に入り、上七軒の街内の織屋も非常に景気よく機音がしていたという。しかし、それらの多くは今日では駐車場やワンルームのマンションになってしまっているという。この時期にレコードデビューした芸妓もいた。お茶屋は少しずつ減っていったが、古い建物の維持の大変さを感じられる語りもあった。

その後昭和50年代から平成に変わると、茶屋数が10軒台、芸妓数10人台、舞妓数4から9名の間で推移した。平成17年にはインターネットの募集に応じた舞妓がデビューして現代に至っている。新しい人材の募集方法が加わった。

5. 今後の課題と2010年度の目標

「北野をどり」という研究対象に関しては、未だ情報が十分とは言えない。そのため、収集しなければならないデータがたくさんある。各年度に関する新聞記事の収集と、それを裏打ちする語りはまだまだ少ない。また、「北野をどり」のパンフレットの芸妓数やお茶屋数の推移の把握も十分ではない。これらを上七軒の事務所である検番などに問い合わせ、データを整備するとともに、上七軒の芸を支えてきた背景、例えば西陣の旦那の心情に関する今まで明らかにされていない語りを収集することを2010年度の目標としている。そのためにも、現地をひんぱんに訪れ、現地の人と語りあっていく。

参考文献

- 明田鉄男, 1990『日本花街史』雄山閣
 石田民三, 1973『京洛風流抄』白川書院
 加藤政洋, 2005『「花街」異空間の都市史』朝日新聞社
 上七軒歌舞会, 1952『第一回北野お(を)どり』上七軒歌舞会
 新撰京都叢書刊行会, 1986『北野社家日記』『新撰京都叢書9号』臨川書店
 竹中聖人, 2007『花街の真正性と差異化の語り—北野上七兼軒と五番町をめぐる』
 立命館大学院先端総合学術研究科博士演習用論文
 西尾久美子, 2006『伝統文化産業の事業システム—花街の事例』神戸大学博士課程提出論文
 西沢暢宏, 2008『花街のおもてなし文化の変遷と課題について—祇園甲部の地方, 幸長さんの談話を元に』『京都産業大学日本文化研究科紀要第12・13号』129-141
 畠中明美, 1999『北野上七軒の街並景観』桑原公德『歴史地理学と地籍学』ナカニシヤ出版

戦前期における外国人の日本旅行と日本へのまなざし

長 坂 契 那

1. 問題の所在

近年、観光活動による地域振興や経済効果に注目が集まり、日本国内では外国人観光客を積極的に誘致する動きが国家ぐるみで行われるようになり、観光研究への要請が高まってきた。しかし、外国人旅